

第106回 岡山外科学会

と き：昭和63年6月18日（土）13時より

と ころ：岡山大学医学部図書館3階講堂

会 長：西 本 詮

（平成元年2月9日受稿）

1. 頭部外傷にたいする MRI の経験

岡山旭東病院脳神経外科 吉岡純二 土井章弘
同 神経内科 風早靖子

近年の画像診断技術の発達は目覚ましく、CT や MRI の出現は、脳神経外科領域の診断、治療に大きな影響を与えた。今回、私達は頭部外傷患者の MRI を従来の CT と比較し、その利点につき報告した。

頭部外傷では、急性期は意識障害で体動があ

り、生命維持装置が必要な場合、scanning time が長く、磁性体を避けなければならない MRI の適応は少ないが、frontal base や temporal tip の病変がよく描き出され、血腫と水腫の鑑別もでき、慢性期における MRI は有用であると思われる。

2. 脊椎病変にたいする MRI の有用性（第一報 cranio-cervical junction）

岡山旭東病院脳神経外科 土井章弘 吉岡純二
同 神経内科 風早靖子

我々の経験した cranio-cervical junction にみられた病変の11症例の内5症例を提示した。Chiari-malformation, basilar impression, tumor, atlanto-axial dislocation, syrinx

gomyelia 等である。cranio-cervical junction の病変、脊髄疾患の診断に MRI はきわめて有用であることを強調した。

3. 悪性脳腫瘍に対するマイクロウェーブアンテナ組織内照射による温熱療法の試み

岡山大学脳神経外科 松海信彦 三島宣哉 国塩勝三
佐藤透 吉田知久 西本詮
岡山協立病院脳神経外科 松本健五

2,450MHz マイクロウェーブアンテナ組織内照射による温熱療法を施行した悪性グリオーマの2例を報告した。出血、感染、痙攣、神経症状の悪化などの合併症は認められず、治療後1

ヵ月後の CT scan で、42℃以上の加温領域で壊死を認めた。本法は密封小線源治療との併用が可能であり、悪性脳腫瘍に対し、安全かつ有効な治療法であることが示唆された。

4. 塩素ガス中毒の1症例

北川病院内科 大谷 裕子 北川 紀典
同 外科 北川 堯之

症例は54歳男性。昭和62年12月28日、誤って塩素ガスを吸入、呼吸困難生じ来院した。口唇チアノーゼがあり、 pO_2 53.8mmHg、 pCO_2 43.3mmHgで、酸素吸入した。胸部X線で右肺にう

っ血像を認めた。循環不全による肝腎障害を認めたが、治療で改善した。塩素ガス中毒は、ARDSを伴うこともあり、治療上注意を要す。

5. 術中アナフィラキシーショックを呈した1例

岡山大学麻酔科蘇生科 馬場 三和 小坂 誠 森田 潔
小林 尚日出

今回、われわれは術中に輸血によると思われるアナフィラキシーショックを経験したので若干の文献的考察を加えて報告した。全身麻酔中は、患者が自覚症状を訴えないため、絶えず観

察を怠らないようにするとともに、アナフィラキシーショックに遭遇した場合は病態生理をよく理解し、適正な処置を早期に行なうことが重要である。

6. 小・中学生の足関節外側側副靭帯損傷の治療経験

岡山赤十字病院整形外科 長野 博志 三宅 完二 小野 勝之
那須 正義 井上 博士 森下 嗣威
川上 和秀 松下 和太郎

小・中学生の足関節外側側副靭帯損傷手術例21例について、損傷部位、短期の子後を検討した。小・中学生の靭帯損傷では剥離骨折を伴う割合が成人より高い。特に小学生では85%が剥離骨折を伴っていた。短期子後は手術例、保存

の治療例において差はなかった。剥離骨折を伴った靭帯損傷においては、骨癒合が得られれば長期子後も理論的によいと考えられる。今後、小・中学生の靭帯損傷の長期子後について検討していきたい。

7. 人工股関節全置換術におけるCell Saverの使用経験

岡山大学整形外科 高橋 右彦 太田 祐介 横山 良樹
花川 志郎 井上 一 田辺 剛造

自己血輸血は同種輸血に比べ安全性が高いといわれている。今回、人工股関節全置換術にCell Saverを使用(29例)して非使用群(47例)と比較検討した。回収量は平均636mlで回収率は約51%であった。検査(Hct, TP, Alb)の経時的

変化では使用群と非使用群との間に有意差は認めず、また感染症、低蛋白血症等の合併症もなかった。Cell Saverは多量の出血が予想される手術には有用と考えられ、今後、術前採血や血液希釈との併用も試みたい。

8. 全人工股関節置換術後の大腿骨々幹部骨折の治療経験

岡山大学整形外科 重政 勝之 井上 一 花川 志郎
高橋 右彦 田辺 剛造
竜操整形外科病院 角南 義文

全人工股関節置換術後の大腿骨々折は、数は少ないが治療に難渋する。我々は本症の4例を経験し3例に long-stem を用いて再置換術を行い2例に良好な結果を得たが、1例は再置換術後も骨癒合が得られず Küntscher 髓用釘を用い

て内固定を行い骨癒合を得た。残り1例は白蓋側、大腿骨側とも骨破壊が強く再置換術不可能なため人工関節抜去後、骨折部を plate 固定した。loosening のある例では骨折をきたし易く早期に再置換術が望ましい。

9. 胸膜肺全摘術を施行した悪性胸膜中皮腫の1例

岡山済生会総合病院外科 川畑 正充 片岡 和男 大原 利憲
日下 敏 丸尾 幸喜 森谷 行利
筒井 信正 間野 清志

症例は74歳男性。咳嗽、労作時呼吸困難を主訴に来院した。胸部 X 線写真で胸水貯留を、胸部 CT にて壁側胸膜の肥厚と結節性腫瘍の突出を認めた。胸水検査、胸膜針生検では確定診断

が得られず試験開胸にふみきった。術中ゲフリールにて悪性胸膜中皮腫と診断され胸膜肺全摘術を施行した。

10. 広範切除を行った再発胸腺カルチノイドの1例

岡山大学第二外科 前田 宏也 丸山 修一郎 武部 晃司
三井 秀也 清水 信義 寺本 滋

我々は再発胸腺カルチノイドに対して広範切除を行った症例を経験した。患者は62歳男性で、56歳時当科にて胸腺腫瘍摘出術施行され、病理所見にて胸腺カルチノイドと診断された。今回前胸部痛を主訴に入院し、放射線療法後手術施

行した。左腕頭静脈、胸骨柄、左鎖骨、左 I・II 肋骨、心膜、左上葉を各々一部合併切除した。グリメウス法にて好銀性顆粒が認められた。胸腺カルチノイドに対しても、積極的な再切除が有効と考える。

11. 胸腺カルチノイドの1症例

川崎医科大学胸部外科 吉川 啓一 藤原 巍 土光 荘六
正木 久男 稲田 洋 森田 一郎
福田 久也 勝村 達喜

カルチノイドは、気管支や消化管などに好発するが、胸腺原発は希である。今回、胸腺原発カルチノイドの1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症例は70歳女性で、胸部異常陰影を指摘され、当科へ紹介入院する。入院時検査所見では貧血

や肝障害はなく、重症筋無力症も存在しなかった。以上より前縦隔腫瘍と診断し手術を胸骨縦切開にて施行した。切除標本は4.3×3.0×2.4cm 大で赤褐色であり、病理所見は比較的小型の均一な腫瘍細胞の充実性増殖よりなり、胸腺カルチノイドと診断した。術後合併症も無く軽快退

院した。切除後の再発や転移の可能性もあり、今後外来にて経過観察を行う予定である。

12. 喀血を主訴に来院した気管支 A-V malformation の 1 例

岡山大学第一外科 波多野 浩明 井上文之 上川康明
岡林孝弘 合地 明 三村 久
折田 薫 三

喀血を主訴に来院し、気管支内腔内に突出した腫瘍としてみられた気管支 A-V malformation の 1 例で、喀血とともに呼吸困難が出現し、気管支鏡にて右中間気管支幹より末梢に血塊がみられ、その内部に腫瘍が存在した。腫瘍は易

出血性で経時的に縮小傾向を示した。手術にて摘出した病理標本では、局所的に拡張した内皮細胞のみからなる血管の集簇がみられ、一部の血管壁に弾性線維を認めることにより気管支動脈静脈瘻と診断した。

13. 単心房、共通房室弁逆流を伴った RV dominant ECD に対する modified Fontan 手術の 1 治験例

心臓病センター榊原病院外科 江石 清行 谷口 堯 畑 隆登
難波 宏文 高田 茂実 中西 克之
杭ノ瀬 昌彦
同 内科 上田 稔 森 一博
東京女子医科大学小児循環器外科 今井 康晴

症例は 6 歳男児で、RV dominant ECD に加え side by side の DORV, inf. PS を伴って左室流出路形成は難しく、また LVEDV も正常の 64%

と小さい為 Fontan 手術を施行し良行な結果を得た。

14. 眼底出血を初発症状として発見された腎動脈瘤の 1 例

川崎医科大学附属川崎病院外科 月山 雅之 吉田 一典 野田 和人
小山 甫
同 泌尿器科 高田 元敬
同 内科 弘中 一江

最近我々は、fibromuscular dysplasia に合併した腎動脈瘤の 1 例を経験したので報告する。

症例は 48 歳の男性。生来健康であったが、昭和 63 年 1 月 4 日に初めて高血圧を指摘され紹介入院となる。血漿レニン活性 16.13ng/ml/hr、右

腎動脈造影では狭窄と動脈瘤が認められ、またレノグラムで右腎は無機能を呈した。以上より腎血管性高血圧と診断し、右腎摘術を行ない症状の改善を認めた。

15. 腎移植 150 例の経験

岡山大学第一外科 田中 信一郎 阪上 賢一 里本 一剛
舟木 真人 淵本 定義 折田 薫三

昭和 49 年に腎移植第 1 例を施行以来本年 5 月までに生体腎 96 例・死体腎 54 例の合計 150 例を経

験した。昭和 57 年に術前輸血 (Donor Specific Transfusion) の導入・昭和 61 年より免疫抑制剤

シクロスポリンの使用により移植腎2年生着率は生体腎81%・死体腎75%と著明に改善されている。これは拒絶反応・合併症の減少に依ると

考える。又、現在死体腎移植希望者は227名にのぼり、国立病院移植センターと協力のもとに死体腎移植のシステム化が行なわれつつある。

16. 巨大腹部腫瘍に起因した下肢の急性静脈血栓症の1例

岡山大学第二外科 丸山 修一郎 武部 晃司 三井 秀也
山田 真 内田 發三 寺本 滋

我々は、最近巨大卵巣腫瘍に起因する急性下肢静脈血栓症の1例に対し、血栓除去術および卵巣摘出術を2期的に行った。術後下肢周囲径差は、順調に減少したが、術後造影では腸骨静脈より末梢の深部静脈は閉塞していた。これは、

本疾患の治療の困難さを示すものである。なお、今後 post-phlebotic syndrome の発生も十分予想されるため、退院後も十分な経過観察が必要と考えられる。

17. 横行結腸切除を伴う臍頭十二指腸切除により切除した胃癌2症例

岡山協立病院外科 左古 昌蔵 渡辺 泰彦 浪尾 博志
川西 瑞哉

胃癌における臍頭十二指腸切除は、他臓器浸潤例やN₃症例に対して、en-blocに郭清できるという意味では合理的な手術と言える。

当院で経験した2例は術中S₃、N₃と診断し、臍頭十二指腸切除および横行結腸切除を施行し

たが、組織学的には治癒切除とはならなかった。しかし、術前幽門狭窄症状を呈する患者が、術後大きな合併症もなく、食事摂取が可能になったということは意味あるものと思われた。

18. 臍癌外科治療におけるわれわれの考え方とその手術手順

岡山大学第一外科 中川 浩一 三村 久 柏野 博正
浜崎 啓介 津下 宏 戸田 佐登志
岡林 孝弘 黒田 宗明 折田 薫三

臍頭部癌の切除成績は、拡大手術の施行にもかかわらず今なお不良である。その大きな要因と考えられるものは肝転移と局所再発である。これらを克服する方法として、後腹膜癌細胞遺残に対する術中照射と共に術中操作による門脈

内癌細胞もみ出しを防ぐ門脈ダブルバイパスによる門脈遮断下臍切除を行ない後腹膜郭清を加える手術法を考案した。1987年4月から5例に本法を施行し、良好な成績を得ているので報告する。

19. 当院における胆嚢心癌症例について

倉敷中央病院外科 吉村 玄浩 高三 秀成

最近8年間で切除しえた胆嚢癌55例を経験したが心癌は10例であった。肉眼的に乳頭型を呈するものが多く、高分化型腺癌であった。画像診断では超音波検査が最もすぐれていた。

手術術式としては単純胆摘、あるいは胆嚢摘

出術に肝床切除または周囲リンパ節郭清を付加する術式を施行したが、リンパ管浸潤、静脈浸潤、神経浸潤は認めず、予後はきわめて良好であり、再発癌による癌死は経験していない。

20. PTGBD が有効であった 3 例

おおもと病院 岩本 伸二 庄 達夫 石原 清宏
酒井 邦彦 岩藤 真治 山本 泰久

症例 1 は血管造影後の無石胆嚢炎，症例 2 は下部胆道閉塞（膵癌）による閉塞性黄疸，症例 3 は胆嚢腫大が主な総胆管結石の症例であり，

3 例共に臨床症状の改善，十分な減黄が可能であった。適応を考えれば，有用な治療法であると思われる。

21. 小腸穿孔例の検討

川崎医科大学消化器外科 藤森 恭孝 清水 裕英 牟礼 勉
柏田 順一郎 笠井 裕 山本 康久
佐野 開三

小腸穿孔例 20 例について検討した。年齢は 21 歳から 77 歳，平均 50.8 歳であった。原因では，外傷が最も多く 7 例，新生物 5 例，膠原病 3 例，穿孔部位は，空腸 9 例，回腸に 11 例であった。外傷例は，すべて鈍的外傷で，予後は良好であ

った。非外傷例では，悪性腫瘍によるものが最も多く，予後は極めて不良で原疾患に左右されると思われた。診断においては，遊離ガスを欠如する例があり，理学所見が，診断及び開腹部位決定の一助となる。

22. S 状結腸への穿通・排膿をきたした急性虫垂炎の 1 例

岡山済生会総合病院外科 高畑 隆臣 北村 元男 文 喆雄
三好 和也 平本 孔彦 木村 秀幸
広瀬 周平 間野 清志

症例は，11 歳女性で下腹部痛を主訴として来院。エコー・CT・注腸検査にて S 状結腸穿孔・

膿瘍形成と診断。手術にて壊疽性虫垂炎穿孔による膿瘍が S 状結腸に穿通したと診断した。

23. 外ヘルニアが原因と考えられる小腸狭窄の 2 例

川崎医科大学附属川崎病院外科 土持 茂之 朝倉 孝弘 木曾 光則
光野 正人 吉岡 一由

今回私達はヘルニアに起因すると考えられる小腸狭窄を 2 例経験したので報告する。

症例 1 は 68 歳，女性，左大腿ヘルニア嵌頓根治術後イレウス症状呈し，開腹にて小腸切除施行。症例 2 は 60 歳，男性，左鼠径ヘルニアによ

ると考えられるイレウスを繰り返す為，小腸切除並びにヘルニア根治術施行。

絞扼腸管の切除に際し術者の判断が重要となり，十分な観察を必要とする。

24. 家族内発生をみとめたクローン病の 1 例

岡山大学第一外科 佐々木 寛 戸田 佐登志 浜田 史洋
渊本 定儀 折田 薫三

クローン病は，口腔から肛門まで全消化管を

侵す慢性炎症性疾患で，その原因は今だに不明

である。欧米では有病率も比較的高く、同胞・家族内発症の報告も多いが、わが国では稀であ

る。今回、我々は同胞内に発症したクローン病を経験したので報告する。

25. 麻痺性イレウスで発症した右側結腸癌の2例

岡山労災病院外科 原田 英 樹 古本 雅 彦 津田 昭 次
石原 弘 道 間野 正 之 杉山 悟

症例1 71歳、女性。2ヵ月にわたる腹痛、便秘、時に嘔吐があり、左横行結腸に恒常的ガス貯留がみられ、注腸検査で左側結腸に器質的病変を見なかった。腸瘍マーカーの上昇があるため精査、肝彎曲部横行結腸癌と判明した。

症例2 70歳、女性。進行性の便秘、嘔吐、

左半結腸に著明なガス拡張と鏡面像があり、麻痺性イレウスとして1ヵ月の内科的治療に反応しなかったため、横行結腸瘻造設を目的に外科転科、血管造影により肝彎曲部上行結腸癌であった。

26. 嚢胞内容液がCEA高値を示した甲状腺髄様癌の1例

岡山大学第二外科 池田 英 二 臼杵 尚 志 小松原 正吉
寺本 滋

54歳男性。6ヵ月来の前頸部腫瘍を主訴に来院。甲状腺右葉に5.5×4.0cm、表面平滑、境界明瞭で軽度の波動がある腫瘍を触知。血清CEA、カルシトニンが高値であり、その他の腫瘍マーカーは正常、他臓器には悪性腫瘍を疑わせる所

見は無かった。嚢胞穿刺液CEAは異常高値で、甲状腺髄様癌が強く疑われた。甲状腺右半切除及びリンパ節郭清施行。病理組織診断は甲状腺髄様癌であり、術後血清CEA・カルシトニンは著明に下降した。

27. 当教室における胃悪性リンパ腫の臨床病理学的検討

岡山大学第一外科 甲斐 恭 平 渡辺 良 平 猶本 良 夫
石根 典 幸 合地 明 上川 康 明
阪上 賢 一 折田 薫 三

昭和53年4月から、昭和63年5月までに、当科に於いて経験した胃原発悪性リンパ腫11例を報告した。11例中10例に胃切除術、R₂以上が施行された。10例中9例に、術後化学療法が施行され、6例は現在も生存中である。

最近経験した1症例は、術前に化学療法が行われ、切除標本内に悪性細胞の残存は見られず、本疾患に対する術前の化学療法は、有意義であると考えられる。

28. 十二指腸神経原性腫瘍の1例

川崎医科大学消化器外科 吉田 和 弘 木元 正 利 長野 秀 樹
岩本 末 治 井上 雅 之 延藤 浩
佐野 開 三

65歳女性に発生した十二指腸 paraganglioma の1例を報告する。本腫瘍は極めて稀で本邦で5例目を考えられる。文献上は腫瘍濃染を見る

ことが多く、鑑別診断の一つとして重要である。機能性腫瘍としてホルモン症状を呈することは少なく、我々の症例も術前にホルモン学的検索

は行っていないが特異な症状はなかった。良悪の判定は組織学的にも困難なことが多く、注意

が必要である。

29. Gardner's syndrome の 1 例

岡山大学第一外科 石根典幸 猶本良夫 浜田史洋
渡辺良平 甲斐恭平 淵本定儀
折田薫三

Gardner 症候群は familial polyposis coli に soft tumor と hard tumor を合併する比較的可能な疾患で、常染色体優性遺伝を示し、発癌機構との関係が注目されている疾患である。我々は、Gardner 症候群の 1 例を経験したので報告する。

患者 54 歳、男性、主訴下血、家族歴、検索した 18 人中 8 人が polyposis coli うち 5 人に、colon cancer を合併していた。検査、ポリープは大腸にびまん性に存在し総計 1,200 個のポリ-

プがあった。また骨腫、胃粘膜下腫瘍を合併しており Gardner 症候群を診断された。また上行結腸の $\phi 2.5\text{cm}$ のポリープに adenocarcinoma が確認された。手術、全結腸切除、直腸粘膜切除、回腸肛門吻合術を施行した。

当科において昭和 38 年より現在までに経験した家族性大腸ポリポージスは 7 家系 21 症例であった。また Gardner 症候群は自験 21 症例中、2 例 (9.5%) であった。

30. 新生児卵巣嚢腫の 1 例

岡山赤十字病院外科 石崎雅浩 佐藤泰雄 大塚康吉
小野監作 川上俊爾 古谷四郎
辻尚志 梅森君樹
同 病理 国友忠義

新生児の卵巣嚢腫の手術例は、本邦では 1973 年の報告以来、1982 年まで 9 例の報告があり、その後も報告が散見されているが成人のものに比べ極めて稀である。我々は、生後 2 日の腹部膨隆のみられる女児に、腹部 X 線写真、腹部超

音波、CT、IP などで卵巣嚢腫と診断し、生後 6 日目に手術にて、 $10 \times 8.5 \times 7.5\text{cm}$ の卵巣嚢腫を摘出した症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

31. 成人の Bochdalek 孔ヘルニアの 1 治験例

国立岡山病院外科 萱野公一 谷崎真行 藤田邦雄
東良平 佐々木澄治

症例は 37 歳の女性。主訴は左側腹部痛。Trendelenburg 位にて増強し左胸部に放散する。胸部 X-P では異常は認められず、後日施行した注腸にて結腸が左胸腔内に脱出しており、側面像で横隔膜の後方より脱出しているのが認められた。

Bochdalek 孔ヘルニアの診断のもと手術を施行した。左第 7 肋間開胸にて到達した。ヘルニア門は横隔膜の後側方に位置し、大きさ $4.5 \times 3.0\text{cm}$ であった。Dacron の felt にてヘルニア門を閉鎖した。